

目的 空間評価に関する多くの研究は評価における共通性の抽出を目的とするが、本研究は共通性の抽出において看過されがちな評価の個人差に着目し、パーソナル・コンストラクト理論に基づいて個人の評価構造の独自性を明らかにするとともに、個人差がもたらされる要因を生活経験に求め、その関連を検討しようとするものである。

方法 アプローチ空間の評価にかかわる物理的要因として、スロープ、手すり、段差、ドア形態の4要因に着目し、それらが等しく含まれる16枚のアプローチ空間の写真を刺激として用い、面接法による心理実験を試みた。生活経験としての生活実態や生活意識の違いが評価構造に及ぼす影響を明確に捉えることを意図し、調査対象者は車イス利用者11名、高齢者21名、健常者23名とし、心理実験とあわせて生活経験に関する自記式質問紙による調査を実施した。調査期日は1993年7月～9月である。

結果 各々の写真の類似度を3段階の分類結果に基づいて点数化し、車イス利用者・高齢者・健常者ごとに多次元尺度法による分析を試み、各被験者の空間評価軸を被験者自身の分類理由のことばとして解釈を行った。その結果、車イス利用者の評価パターンは一つに集約され、高齢者の場合には5つ、健常者の場合には6つの典型的な評価パターンが認められた。さらに、それらの各評価パターンにおける個人差としての軸ウェイトと、総合評価としての各写真の順位づけとの関連を検討した結果、障害者では車イスの利用時間・利用年数が総合評価に影響を及ぼし、健常者では障害者や高齢者の存在の身近かさおよび福祉意識などが軸形成および総合評価に影響を及ぼすことが明らかとなった。